

**「異界」へのいざない**  
**—ドイツ、日本、中国の文学・音楽から—**  
聖徳大学言語文化研究所第 136 回公開研究発表会

2011 年 6 月 5 日（日）13：00～15：30

聖徳大学生涯学習社会貢献センター（聖徳大学 10 号館）

**<要旨>**

**司会・コメンテーター／大野 寿子**

**竹原 威滋**

**高橋 吉文**

本シンポジウムでは、「異界」（die andere Welt, the other world）という語を、「死後世界」（あの世、他界等）のみならず「時間的空間的に異なった領域」（ユートピア、マクロコスモス、異文化、非日常空間、空想世界等）をも指し示す、古来より現代に至る人間の日常生活および精神生活の「影」「裏」「奥」に存在しうる必要不可欠な空間領域と定義する。その「異界」の表れ方、「異界」に属するもの、「異界」への越境の仕掛け等を、ドイツ、日本、中国の文芸作品において比較検証するとともに、文字テキストではなく音楽テキストにおける「異界」表現にも言及し、「異界」の持つ普遍性と地域性、表現の可能性とその限界とを、学際的視野より比較考察する。

## ＜発表 1＞

### 異界への越境の音楽表現 —グスタフ・マーラーを中心に—

山本 まり子

本発表では、伝承文芸に由来するグスタフ・マーラー（1860-1911）の作品群を中心に、非日常・非現実世界としての異界が音楽でどのように扱われているか、また、異界への越境がどのような音楽的手段で具現化されているかを、音響資料を提示することによって実証的に明らかにする。

ヴァーグナーをはじめとする特にドイツ語圏のオペラ／楽劇においては、ある世界と別の世界、あるいは日常世界の者と非日常世界の者との差異は舞台上で視覚的に演出され、場と場を繋ぐ音楽の生成的变化により越境が表現される。

一方、オペラを残さなかったマーラーの作品では、自然と人間、生と死、昼と夜、聖と俗といった対比的領域が頻繁に描かれるが、これらは『少年の魔法の角笛』などの伝承素材にすでに現れている場合が多い。相対的に異界たりえる両領域の相違は、ヨーロッパ音楽の伝統的な表現手法の使用や歌詞テキストと音楽テキストの融合、あるいは独立した2曲の対置などによって多様に表現されている。例えば越境を「ラッパ＝死／再生」、「ホルン＝森」といった記号的手段によって明示したり、生と死の世界の併置を付曲上の戦略によって描き分けようとしたりするものである。

本発表ではドイツ文学や伝承研究の成果を踏まえつつ、明治維新以降ドイツ語圏の音楽を広く受容・解釈してきた日本というもう一つの視点も考慮しながら、時間芸術である音楽における異界の表現および異界へ越境の仕掛けについて浮き彫りにしたい。

## ＜発表2＞

### ドイツの民間伝承における異界と異人 —ハーメルンの笛吹き男からメフィストフェレスまで—

溝井 裕一

本発表では、ドイツ民間伝承において異界・異人がいかなる形で描かれているかに光を当てるとともに、日本の伝承と比較し、日独の異界観の共通点・相違点について考察する。

『日本人の異界観』において小松和彦氏は、「異界」は空間的・時間的な特徴を備えていると説く。すなわち異界は山や海など人間界の周縁にあるとされる傾向にあるが、同時に異界は死後の世界とも、時間の流れが異なる世界とも認識される。「浦島伝説」における海中の異界はその典型であろう。

だがドイツの伝承においても、これに類似した異界観が存在していた。例えば人間界の周縁にある山、森、水源などは異界が表出する場であると信じられた。山で子どもが失踪したという「ハーメルンの笛吹き男伝説」（13-14世紀）は、こうした異界観をもとにしている。また修道士が森の異界から帰ってくると数百年が経っていたという伝説（12世紀）は、日本の「浦島伝説」を想起させる。

一方で、悪魔にまつわる伝説はこれと異なる様相を呈する。悪魔は空間を超越した異人であり、周縁部、異界の区別なく跳梁跋扈する存在である。16世紀の「ファウスト伝説」は、そうした異人像を濃厚に反映させている。

このように異界観は、地理的環境や人々の生活様式のみならず、宗教との関係においても発展する。それゆえ発表者は、中世～近世の日独文化を広く視野にとらえつつ、両者の異界観の特質について論じていきたい。

### <発表3>

## 日本古典文学における異界への越境とその仕掛け —『源氏物語』「夕顔」巻の場合—

河地 修

本発表では、11世紀に成立した日本最古の女流文学である紫式部『源氏物語』の第四帖「夕顔物語」をテキストとし、その世界が、日常生活における非日常的素材や要素を、いかに虚構性を排しながら表現されているかに注目したい。

非日常的なるものとは、生者に突然訪れる「死」であり、さらに、その「死」に関わる死にゆく者と遺される者との間で繰り広げられる「愛」や「悲しみ」にまつわるドラスティックなドラマであり、そこには、「死」に伴う、死の世界、彼岸あるいは他界（これらを総じて本発表では異界とする）との往還（越境）の問題が付随する。

紫式部というリアリストが、いかなる「異界への越境の仕掛け」を試みたかを、日常と非日常との相克という観点から検証する際に、その前提として、平安京という都市空間（土地）が、非日常的なものを、そのまま包括（内在）させていたということが注目される。この内包性は、異界との境界としての「鴨川」、「河原院」を舞台とする「昼と夜」、「光と闇」との対照の中にも浮上してくるのであり、さらに、ヒロイン「夕顔」の表徴としての「夕顔の花」自体が、「闇空間」への入り口に白く咲いて異界へと誘う「夜の花」であったことにも象徴的に表現されている。

現代から想起する「平安時代」という異空間（異界）の在り方を、日本とは違う文化圏（ここでは主にドイツ語圏）と対比させることを念頭に置きながら、この物語が、いかなる表現構築を試みているかを具体的に考察したい。

## ＜発表4＞

### 中国の古典文献にみる異界と異人 —道教「神仙説」を中心に—

山田 利明

古典的研究ではあるが、ジェームズ・フレイザーの『金枝篇』は、中国古典文献の研究ではよく引用される欧米文献の一つである。その研究法が文献主義に依ったところが、中国の文献考証学と類似するため、欧米の中国学者にも共感されるところが多いようである。この『金枝篇』の中に記された古代の祭祀・信仰は、実は中国の一部にも近代に至るまで存在した。ただしそれらは、宗教的に洗練された形式を備えていたから、その本質を露わにすることは稀であった。

例えば、道教における錬金術も、その初期には魔術的色彩の濃いものであったが、後には瞑想と精神修養を主とすることで、体内に黄金を作るという修行法に変化して行く。こうなると、表面上は錬金術の持つ魔術的側面が消えて、精神修養が表に出るが、実際には物質としての黄金の体内製造が求められた。つまり、黄金を作るという本質に何の変化もない。

異界についていえば、かつてはこの世の延長上に存在した仙人世界（仙界）が、この世とは一線を画した世界に変化して行く。当然ながら異人たちもこの世の人とは異なる性格を持ち、異なる生き方をする。そのあたりの仙人風俗を古典文献の中から明らかにしてみたい。併せて原初的な呪術信仰が、どのように洗練された信仰に変化しうるのか、という問題についても触れてみる。